

# 大都会の六本木ヒルズ屋上に出現した農の風景（東京都港区）



写真提供：六本木ヒルズ

## ■ 制震システムを兼ねた屋上庭園

春は桜、夏はサルスベリ、秋はモミジ、冬は寒ツバキと、四季折々の樹木が四方を囲み、水田や菜園で農作物も実る、六本木ヒルズ・けやき坂コンプレックスの屋上庭園。地上45m、約1300㎡の庭園は、文化・情報の発信地である六本木ヒルズのほぼ中心にあり、平成15年のヒルズオープン以来、農作業体験を通して、楽しみながら日本の伝統文化・食・環境について学ぶことのできる機会を提供。六本木ヒルズのコミュニティ活動の場としての役割を果たしている。

この屋上庭園には、この庭園のために開発されたシステム「グリーンマスダンパー」が採用されている。グリーンマスダンパーは、大重量（3650t）となる庭園の構造負担を利用した制震システム。建物本体と絶縁された屋上緑化部分を大きく揺らすことで地震エネルギーを吸収し、建物の変形や揺れを30%小さくする仕組みで、高い耐震性をもつ。さらに、本格的な屋上緑化の実現により、真夏時の空調負荷の低減や、環境に配慮された庭園部分は都市のヒートアイランド現象の緩和に効果を発揮している。

その他、屋上庭園の灌水には基本的に雨水を再利用しており、雨水を貯留タンクにため、池の流れを介して水田に供給する循環システムと温度調節を両立している。

## ■ 毎年恒例の稲作イベントが好評

オープン以来、毎年恒例となっている稲作イベントでは、平成18年にコシヒカリ誕生50周年を記念して、コシヒカリの生誕の地・福井県とのコラボレーションを実施。平成20年5月には、環境先進県の京都府とコラボレーションし、六本木ヒルズに在住、在勤の人などの家族約130人を対象に、丹後産コシヒカリと新羽二重糯の田植えイベントが行われた。加えて、地球温暖化が水田の生物や米にどう影響するか、環境問題について考えるワークショップも開かれた。今後は、稲刈り、もちつき、稲わらを使ったワークショップを行う予定。稲作イベントには、毎年参加している親子もいるようで、定着した人気のイベントとなっている。

また菜園では、小学館の雑誌「edu」との共同企画で夏と冬の2回、野菜の生長を通して親子で環境や食の大切さについて考えるワークショップを実施。雑誌の読者親子20人により野菜の苗の植え付け、観察、収穫が行われ、好評を得ている。

## ■ 日本の原風景を伝える場

東京タワーや近代的な建物を望む立地でありながら、昔懐かしい日本の原風景が広がる庭園には、風が吹き渡り、水田や池に放たれたクチボソ、ドジョウ、トウキョウダルマガエルが棲息し、トンボやチョウも飛び交う。また、今では植栽されていない植物、ツクシなども顔を出すようになったそうだ。海外から六本木ヒルズの視察に訪れる人々にとっても、近代的建造物やシステムとともに、都心で日本の農風景を体感できる稀有な存在となっている。

これからの時代、食という実りをもたらす農の風景は、生活者にさまざまな安らぎを与えるだろう。植物や生物の成長とともに進化している、六本木ヒルズの空中庭園に期待されることも大きい。

※現在、屋上庭園は通常非公開となっている



東京タワーが見えるビルの屋上には、懐かしい日本の農風景が広がっている。水田にはドジョウやトウキョウダルマガエルが棲息し、自然の生態系が再現された



屋上庭園全景



毎年恒例となっている稲作イベント。六本木ヒルズ在住や在勤の家族が参加し、泥んこになりながら田植えを体験（平成20年のようす）



畑には賀茂ナスや伏見トウガラシなどの京野菜が実っている（平成20年のようす）